



杏雨書屋(きょううしょおく)は大阪市にある公益財団法人武田科学振興財団が運営する図書資料館。国宝や重要文化財のほか、国内でもトップクラスの古医書を収蔵しています。このコーナーでは先人が古医書に残した現代に通じるメッセージを、小曾戸先生に紐解いていただきます。

其ノ九 啓迪集 ー日本漢方の源流ー

案内人◇小曾戸 洋(北里大学東洋医学総合研究所 医史学研究部 部長)

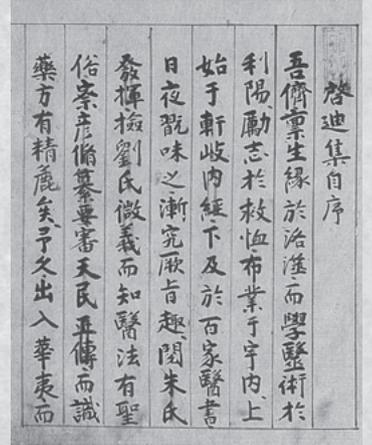
中近世の医学書として 初めて重要文化財に指定

2014年8月、杏雨書屋所蔵の『啓迪集』2点が、国の重要文化財に新指定されました。日本の中世から近世の医学書が重要文化財に指定されるのは初めてで、漢方界または医史学界としては画期的なことです。日本の漢方医学書が国の文化財として評価された証にほかならないからです。

『啓迪集』全8巻は室町時代末期から安土桃山時代に活躍した名医、曲直瀬道三(1507-94)によって書かれました。京都に生まれ、関東足利学校に学び、その際、田代三喜との出会いがきっかけで、医に専念しました。京に帰って啓迪院という医学校を創設し、多くの門人を集めて医学教育を行うとともに、時の権力者、足利義輝・毛利元就・織田信長・豊臣秀吉や天皇・上皇の信任を得てその医療を担当。千利休などとも親交をもった超一流の文化人でした。



曲直瀬道三の肖像
(1577年画)杏雨書屋所蔵



重要文化財に指定された『啓迪集』
(自序の部分)杏雨書屋所蔵

自らの長寿によって医薬の効能を示す

『啓迪集』は天正2年(1574)に正親町天皇に献上され、感銘した天皇は天龍寺の名僧・策彦周良に命じて題辞(序文)を書かせました。道三是个々の薬物効能を根本とした処方学を重視し、処方学を自在に操りました。日本漢方の源流はここにあるといっても過言ではありません。人生50年といわれた当時、道三は87歳という長寿をまっとうし、死の直前まで筆を持ち続けました。戦国武将で最も長生きしたのは75歳の徳川家康と毛利元就の二人です。道三の後継者の玄朔も83歳まで元気に生きました。彼らは身をもって医薬の効能を証明したのです。その著書には八味丸や半夏瀉心湯など現代汎用の漢方処方についても運用のコツが書かれています。道三は人間性こそが名医たる必須条件であることを熟知していました。人々の心をとらえて離さない道三の魅力はここにあります。「医は仁術(医は人命を救う博愛の道である)」。それは昔も今も変わらぬ条理です。

これまで9回にわたり杏雨書屋の古医書を通じて先人の知恵の一端をご紹介します。ご愛読いただき心より御礼申し上げます。



日本の医薬は「仁(おもいやり、いつくしみ)」を基本理念として発展してきました。

小曾戸 洋(こそと ひろし)

日本医史学会理事長、杏雨書屋副館長、上海中医薬大学客員教授。1950年山口県下関で小曾戸丈夫氏の長男として生まれる。宋の時代に散逸した貴重書『小品方』の発見や馬王堆(まおうたい)という中国湖南省にある紀元前2世紀の遺跡で発見された医書の解説により、中国でも医史学研究で著名な成果をあげる。主な著書『日本漢方典籍辞典』(大修館書店)、『中国医学古典と日本』(瑞書房)、『漢方の歴史』(大修館書店あじあブックス)。